

「普通」の人はこの世に存在するか。

西村 鈴（コミュニティ政策学科4年）

小学校3年の時、仲良くなった女の子がいた。リナ（仮名）という子だ。

リナは平均よりも体の大きな子で、私はいつも列の先頭に並ぶような子どもだった。当時の私はほぼ毎日彼女の家に誘われ、遊んでいた。遊ぶときに彼女は時折、「リンのものはリナのもの、リナのものもリナのもの。」とささやいた。

リナが私のことを好きなのは知っていた。私の家族は全く仲の良い家族ではなかったが、たまに、外食に行くからとリナの遊びを断ると、「困らんね。」と言って機嫌を損ねてしまうことがあった。私はリナの寂しさを知っていたから、何も責められなかった。リナには父親がいなかった。

それから彼女は、何か都合が悪いことがあると、

「リンは常識を知らない。」とか「そんなの普通じゃない。」などと言って怒った。それは往々にして突然で、その沸点がどこにあるのか見出すのが難しかった。よくわからないけれど、謝るとまた日常に戻るので、いつも「ごめんね。」と言った。

いやだとかいじめだとは思わなかった。それがリナなのだ認識していた。私は「普通」ではないけれど、リナと一緒にいてくれているのだと思っていた。

朝、学校について、一番に心配になることは、リナが私との昨日の会話を思い起こして、突然「普通」じゃないと言い出すか否かだった。

このころから、私は「普通」を考え始めた。「普通はそんなことしない」とか「それは常軌を逸している」の「普通」や「常軌」が一体どこからやってきて決まっているのだろう。という疑問だった。誰が「普通」の首謀者で、どうしてみんなやみんなのお母さんはそれをすべて知っていて、うちはそうではないのだろうと考えていた。母の言うことを疑うようになって、母に相談するのをやめた。

高校に入って、マーチングバンド部に入部した。マーチングバンド部には様々なルールがあった。例えば、「くしゃみをしたら、その都度すみませんと言わなくてはならない」とか、「先輩への年賀状にはカラーを使ってはいけない」「打楽器パートは合宿では利き手ではない手で箸をもって、先生が解除というまで、その手でご飯

を食べなくてはならない」のようなルールだ。高校から外部生として入り、中学はバドミントン部にいた私は、これらのルールに驚いたが、顧問（大人）のいる前でこのルールが当然のように踏襲されていたから、社会やコミュニティにはそのコミュニティ独自の「普通」が存在するのだとなんとなく理解した。

大学生活を私は5年やった。3年目はカナダのトロントで過ごした。電車に乗れば白人と黒人に黄色の私が挟まれて座ることも日常で起こる国だ。カナダでの多くの時間を過ごしたホストファミリーは私に本当によくしてくれた。一緒に買い物に行くことも多かったし、週末にはピーチパイを焼いた。

私の部屋と空調の通気口でつながった隣の部屋にいるホストシスターは、夜になるとマリファナや危ない薬をやって、友達とよくハイになっていた。シングルファーザーのホストファーザーはそのことに悩み、何度も私にどうしたらよいかと相談した。

それぞれの人間が、それぞれの悩みを抱えていることと、それは絶対に画一的ではないということを知った。そして、そのひとつひとつに敏感にならなくてはいけないということも。

トロントで差別に遭うことは幸いにもほとんどなかった。ただ、現地の中国人は容赦なく差別されていたし、私はそういう光景を見ると、アジア人であるということがこの地ではやはり「普通」ではないと感じることがあった。自分がマイノリティになると、自分や、日本という国（日本はむしろ世界で最もユニークな国だと、カナダに行って思った。）は、別に「普通」ではないなと実感するのだ。

日本に帰ってきてから出会った人たちの中に、「そんな普通じゃねーよ」とか「常軌を逸してる」と人に言ってしまう人に多く遭遇した。私と言われることもあった。私はその事実悲しみを覚えたし、日本に帰ってきてから、最も順応できないことだった。そういう人が往々にして、「自分の友達も家族もみんなそう言ってる」などと総意のように豪語するのも興味深かった。自分のいるコミュニティの常識が世界の常識だと思っているのかもしれないと思って、私は危ないなと感じたけれど、彼らにはきっと、彼らがマイノリティと扱われ、なぜか「普通」じゃないと糾弾される機会がなかったのだと推し量ると、もはや何も言えなかった。

自分の中に信念をもつことや、考えを持つことは絶賛されるべきだと私は思う。自分の愛着のあるコミュニティを大切にすることも人生の中で最も重要なことと言ってよいかも知れない。

しかし、自分の所属するコミュニティは決して世の中の「普通」ではない。それどころか、日本という大きなコミュニティですら、世界の「普通」ではない。ミク

ロなレベルで見れば、1人ひとりがすべて異なっている。100人の人がいるのなら、人生も経験も感情も100通り存在し、仮にその100人が全く同じものを見たとしても、その100人のバックグラウンドが異なるために、そのものに対する感情や見解は、結局のところ同じくして、100通り存在するだろう。

先日、地元で数年ぶりにリナを見かけた。話しかけると、最初は不審そうにしたけれど、私の名前を言うと、すぐに分かった顔をした。

彼女と話したのはほんの数分だったが、別れる際、「覚えてくれて、ありがとう。」

と、私の背後から声がかかった。彼女の心を見た。

大学生生活の5年間をコミュニティ福祉学部で過ごせたことは幸運だった。多様なバックグラウンドとコミュニティに対する興味と理解を深め、また、それを受け入れようとする、若く優しい同志たちに出会うことができた。

積年の疑問：「普通」の人間が存在するのか。に対する私の答えは、否だと思った。5年間の大学生活の中で、最も大きな学びだった。